



「子育て支援に役立つ質問票」の小学生を持つ母親を
対象とした妥当性の検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-05-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小池, 徳子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017389

「子育て支援に役立つ質問票」の小学生を持つ 母親を対象とした妥当性の検討

小池 徳子

1. 問題と目的

「子育て支援に役立つ質問票（以下、子育て質問票）」とは、A大学心理臨床センターにおいて、子育てについての相談を重ねる中で、「心身症や虐待問題、発達障がいの可能性をいち早く捉える必要」を感じたことから、「臨床心理学的な支援を狙いとし」、「問題を短時間で簡便に把握」することを目的に作成された（川原・総田, 2013）。子育て質問票は「親子のこころとからだ」「発達障がい」「家族機能」の3つの観点から、親子の身体性、「発達障がいの傾向や可能性」、「家族機能」や「サポート資源」について問う31項目で構成されている（高橋ら, 2013; 川部ら, 2013; 橋本ら, 2013）。総田ら（2014）は子育て質問票の有用性を検証する為、子育て質問票をアセスメントに生かした事例の検討を行った。その結果、子育て質問票の回答には「子どもの特性」「養育者と子どもとの関係」「養育者自身の特性」が表れていると考えられ、子育て質問票と「治療経過は概ねよく合致して」いることが示唆され、臨床的意義が示された。

小池ら（2017）は子育て相談に訪れた養育者と相談機関を訪れていない養育者のデータを合わせて因子分析を行い、5因子（「子どもの困難」、「育児困難」、「親子関係困難」、「生々しさへの抵抗」、「相互性」）を抽出し（表1）、さらに各因子の意味を事例の特徴から検討した。その結果、「子どもの困難」は子どもの発達のな特徴に加えて、養育者も子どもに発達の遅れがあるのではないかと思う傾向を、「育児困難」は養育者の情緒的に子どもを抱える力の脆弱さや子育てが支援されていないと感じているか否かを、「親子関係困難」は養育者が親役割を過度に担おうとし、親子関係が閉鎖的になっている可能性を、「生々しさへの抵抗」は養育者が感じた子どもの成長や状態より、他者や本等、外からの情報を基に子育てを行う傾向を、「相互性」は養育者が子どもに自分を重ね、自分の不安の一部を子どもに担わせている可能性を測っていると考えられている。

総田ら（2014）、小池ら（2017）より子育て質問票は、親子の心身の関わりや発達障がい、家族機能の観点を基に、養育者自身や親子関係、子どもについてのアセスメントに有効である可能性が示されてきた。一方で

表1 子育て質問票の各因子の項目（小池ら, 2017）

因子名	質問項目
子どもの困難	ふとしたことで取り乱し、落ちつくのに時間がかかる。
	友達と仲よくしたい気持ちがあるが、友達関係をうまくつけれない
	子どもは私のいいつけをよく守る。
	私とのコミュニケーションがスムーズである。
	人からのちょっとした働きかけを嫌がる。
	ルールのある遊びを楽しめる。
育児困難	何が面白いのかよく分からない遊びを延々とする。
	言葉の使い方に特徴がある。
	育児の相談をできる人がいる。
	誰にも育児を手伝ってもらえない。
親子関係困難	育児に自信が持てない。
	なぜか疲れやすい。
	子どもが好きと思えない。
	子どものいやな気持ちを取り除くことは母親の役目である
	子どもが期待通りにいなくて困る。
	子どもの欠点が目につく。
生々しさへの抵抗	子どもが何か悪いことをすると私のせいだと思ってしまう
	子どもに対してイライラする。
	感覚が敏感なときがある。
	オムツを変えるのはゆううつだった
相互性	子どもに公園の砂場で砂遊びをさせることに抵抗がある
	わが子が、なぜ甘えてくるのかわからない時がある。
	子どもに関心に向ける余裕がない。
	子どもは気持ちが不安定になるとからだの調子が悪くなる
相互性	痛がっていることも身体のさをすると、痛みがおさまることがある
	子どもと目が合うとうれしい

注1) 「どうしてここに来ないといけないうわからない」「今ある症状をいっくも早く取り除いてほしい」は臨床群のみの項目の為除外した上で因子分析を行っており、「運動が得意だ」「手先が不器用である」「妊娠や出産の時に嬉しくなかった」は因子分析の結果、因子負荷量が0.3未満だった為除外項目となった。

注2) 逆転項目を網掛けで示した。

子育て質問票の項目について、妥当性の検証は行われておらず、総田ら（2014）が「投影法的性格が強い」と述べたように、結果の読み取りの深さが使用者の経験に左右されてきた。子育て支援の現場で活かす為には、投影法的解釈のみならず、統計的に読み取れる情報をいかに実際場面に活かせるかを検証する必要がある。ゆえに本研究の目的は子育て質問票の妥当性の検証を行い、子育て支援に寄与することである。

本研究では信頼性と妥当性が検証されている既存の心理尺度を外的基準として用いた基準関連妥当性の検討と子育て質問票の結果と臨床心理士3名による事例の評定の相関係数を用いた内容妥当性の検討を行なった。子どもの年齢や養育者の性別によって必要な支援が異なると考え、今回は小学生の子どもを持つ母親に焦点を当てることにした。

II. 方法

1. 基準関連妥当性

(1) 調査時期及び調査対象者

調査時期は2018年11月～2019年3月であった。調査対象者は小学生の母親200名で、103名より回収でき、回収率は51.5%であった。子どもが小学生でないものや母親以外が回答しているものを除き、98名の有効回答を得た。母親の年齢は平均41.3歳、SD = 3.88、子どもは平均9.64歳、SD = 1.56、男児55名、女児41名、性別不明が2名であった。

(2) 外的基準

基準関連妥当性の検証を行う為の外的基準として日本版Parenting Stress Index（以下、日本版PSI）（奈良間ら、1999）と肯定的・否定的養育行動尺度（以下、PNPS）

（伊藤ら、2014）の下位尺度を採用した。日本版PSI、PNPSの作成者に予め使用の許可を得た。

日本版PSIはAbidin（1986）が作成した多面的に育児ストレスを測定する質問紙を日本語に訳し、乳幼児の母親を対象に信頼性と妥当性が検証された78項目の質問紙である。「子どもの特徴に関わるストレス」と「親自身にかかわるストレス」の2つの側面から構成されている。「子どもの特徴にかかわるストレス」は7因子（「親を喜ばせる反応が少ない」、「子どもの機嫌の悪さ」、「子どもが期待通りにいかない」、「子どもの気が散りやすい／多動」、「親に付きまとう／人に慣れにくい」、「子どもに問題を感じる」、「刺激に過敏に反応する／ものに慣れにくい」）、「親自身に関わるストレス」は8因子（「親役割によって生じる規制」、「社会的孤立」、「夫との関係」、「親としての有能さ」、「抑鬱・罪悪感」、「退院後の気落ち」、「子どもに愛着を感じにくい」、「健康状態」）が抽出されている。日本版PSIは乳幼児の母親対象であるが、米国の原版のPSIは小学生までを対象として信頼性と妥当性を検証しており、項目の内容からも子育て質問票の外的基準として採用した。

子育て質問票の各因子と対応する外的基準を表2に示した。子育て質問票の「子どもの困難」は「子どもの特徴に関わるストレス」の下位尺度の「親を喜ばせる反応が少ない」、「子どもの機嫌の悪さ」、「子どもの気が散りやすい／多動」、「刺激に過敏に反応する／ものに慣れにくい」と対応すると考え、これによって妥当性を検証する。「育児困難」は「親自身に関わるストレス」の「社会的孤立」、「夫との関係」と、「親子関係困難」は「親自身に関わるストレス」の「親役割

表2 子育て質問票と外的基準の対応表

子育て質問票	外的基準となる尺度	下位尺度
子どもの困難	日本版PSIの「子どもの特徴に関わるストレス」	「親を喜ばせる反応が少ない」 「子どもの機嫌の悪さ」 「子どもの気が散りやすい／多動」 「刺激に過敏に反応する／ものに慣れにくい」
	日本版PSIの「親自身に関わるストレス」	「社会的孤立」 「夫との関係」
親子関係困難	日本版PSIの「親自身に関わるストレス」	「親役割によって生じる規制」 「夫との関係」 「親としての有能さ」 「抑鬱・罪悪感」
	日本版PSIの「子どもの特徴に関わるストレス」	「子どもの機嫌の悪さ」 「子どもが期待通りにいかない」
生々しさへの抵抗	PNPSの「否定的養育」	「非一貫性」
相互性	PNPSの「肯定的養育」	「肯定的応答性」

によって生じる規制」,「夫との関係」,「親としての有能さ」,「抑鬱・罪悪感」,「子どもの特徴に関わるストレス」の「子どもの機嫌の悪さ」,「子どもが期待通りにいかない」と対応すると推測される。

子育て質問票の「生々しさへの抵抗」と「相互性」は養育行動と対応すると考え、PNPSの下位尺度を外来的基準として採用した。PNPSは養育行動を、肯定的・否定的養育の両側面から評価する35項目の質問紙である。養育行動の構造を、一次因子の「関与」「肯定的応答性」「見守り」「意思の尊重」を説明する二次因子として「肯定的養育」を想定し、「過干渉」「非一貫性」「厳しい叱責・体罰」を説明する二次因子として「否定的養育」を想定した二次因子モデルに基づき作成されている。小中学生の子どもの親を対象に二次因子モデルの検討及び、外来的基準を用いて構成概念妥当性が検討されている。項目の内容から子育て質問票の「生々しさへの抵抗」は「否定的養育」の「非一貫性」と、「相互性」は「肯定的養育」の「肯定的応答性」と対応すると推測される。

(3) 手続き

小学生の母親200名に子育て質問票と日本版PSI, PNPSを直接または知人を介して配布した。研究対象者には研究への参加が任意であること、質問票への記入をもって研究協力の同意とすること、回答したくない項目には回答する必要がないこと、回答をいつでも

中止できることを文書にて説明した。回答は封筒に入れてもらい手渡しまたは郵送にて回収した。原版に従い、子育て質問票は「まったくあてはまらない」～「かなりあてはまる」の5件法で、日本版PSIはa-dの4件法とa-e,「まったくちがう」～「まったくそのとおり」の5件法で、PNPSは「ない・ほとんどない」～「非常によくある」の4件法で回答してもらった。データは数値化し、SAS university editionを用いて統計的に処理を行なった。

2. 内容妥当性

(1) 調査時期及び調査対象者

調査時期はX年4月～X+7年7月であった。調査対象者はA大学心理臨床センターに子育ての相談で訪れ、子育て質問票に回答した養育者189名の内、回答に不備がなく、回答者が母親で、かつ子どもが小学生である64名であった。母親の年齢は平均41.53歳, SD=5.42, 子どもの年齢は6～12歳で平均9.29歳, SD=1.57であった。男児は39名, 女児は25名であった。

(2) チェックリスト

小池ら(2017)で考察されている子育て質問票で測っているものをチェックリスト化し、A大学所属の臨床心理士と協議を行い、文言を整え、チェックリストの形にまとめた(表3)。「子どもの困難」は「親の子に対する眼差し」と「子どもの特徴」の相互作用が影響

表3 チェックリスト項目

対応する因子	チェックリスト項目
①子どもの困難	子どもは常同・こだわりといった発達障がい様の特徴を持っている。 子どもは他者とうまく関係を作りにくい。 養育者は子どもの特徴に対して困難を抱えている。 養育者は子どもの言動に対して困惑している。
②育児困難	養育者は子育てに於いて周囲からサポートされていると感じている。 養育者は子どもの気持ちを考えたり受け止めたりしにくい。 養育者は子育てに疲弊している。 養育者は他者にうまく頼れない。
③親子関係困難	養育者は自分がかしなないという思いが強い。 子育てへの情緒的な関与、思い入れが強い。 子育てへの自責感が強い。 子どもに過干渉になりやすい。 子育てへの責任感がある。
④生々しさへの抵抗	子どもに関心を向けにくい。 子どもが遊んだりして汚れたり汚すことを受け入れにくい。 子どもの姿をそのまま受け入れることが難しい。 子どもを養育者自身の論理に当てはめる傾向がある。 子どものペースを受け入れることが難しい。
⑤相互性	親子の情緒的な交流が乏しい。 親子の交流が具体的な行動によって図られる傾向がある。 親は子どもが心の不調を身体症状として表出しやすいと捉えている。

し、子どもが表出する問題とそれに対して親が感じている困難さを測っていると考えられる。「育児困難」は実際の子育て支援の有無よりも養育者が子育ての支援を受けていると感じているか否かと、養育者が子どもを情緒的に「抱える」力を測っていると考えられる。「親子関係困難」は子ども及び子育てに対する養育者のネガティブな感情と子どもや子育てへのコミットメントの度合いを測っていると考えられる。「生々しさへの抵抗」は子育てにおける生々しさ、子どもの衝動性、心の未分化な、原始的なものへの抵抗を測っていると考えられる。得点が高い場合、子どものペースに合わせてたり、養育者が感じた子どもの成長や状態を基に子育てをすることが難しいと考えられる。「相互性」は子どもの心身の相互性、親子の身体を媒介としたやり取りを測っていると考えられる。得点が高い場合、一見情緒的な交流があるようで、実は具体的な行動レベルで留まっている可能性が考えられる。これらを基に各因子と対応するチェックリストを作成した。

(3) 手続き

A大学の臨床心理士3名が独立に各事例の担当者のアセスメントも含めたインテーク報告書を「まったくあてはまらない」～「かなりあてはまる」の5件法で評定し、3名の平均を分析に用いた。データはSAS university editionで統計的処理を行なった。

3. 倫理的配慮

本研究は大阪府立大学人間社会システム科学研究科における研究倫理委員会の承認を受け実施した。

Ⅲ. 結果

1. 基準関連妥当性

子育て質問票の尺度構成は小池ら(2017)の分類を使用する(表1)。表4に子育て質問票、日本版PSI、PNPSの下位尺度毎の合計得点の記述統計と子育て質問票と日本版PSI、PNPSの相関係数を示した。「親を喜ばせる反応が少ない」～「刺激に過敏に反応する／ものに慣れにくい」が「子どもの特徴に関わるストレス」の下位尺度であり、「親役割によって生じる規制」～「健康状態」が「親自身に関わるストレス」の下位尺度である。「関与・見守り」～「意見の尊重」が「肯定的養育」の下位尺度であり、「過干渉」～「激しい叱責・体罰」が「否定的養育」の下位尺度である。

子育て質問票の「子どもの困難」は対応すると考えられた日本版PSIの「子どもの特徴に関わるストレス」の下位尺度の「親を喜ばせる反応が少ない」($r=.48, p<.01$)、「子どもの機嫌の悪さ」($r=.57, p<.01$)、「子

どもの気が散りやすい／多動」($r=.52, p<.01$)、「刺激に過敏に反応する／ものに慣れにくい」($r=.56, p<.01$)と中程度の正の相関がみられた。「育児困難」は対応すると考えられた日本版PSIの「親自身に関わるストレス」の「社会的孤立」と中程度の正の相関がみられた($r=.52, p<.01$)。「夫との関係」と弱い正の相関が見られた($r=.24, p<.05$)。「親子関係困難」は対応すると考えられた日本版PSIの「親役割によって生じる規制」($r=.20, n.s.$)と「夫との関係」($r=.06, n.s.$)は相関係数が有意ではなかった。「親としての有能さ」($r=.50, p<.01$)、「抑鬱・罪悪感」($r=.67, p<.01$)と中程度の正の相関が見られた。「子どもの特徴に関わるストレス」の「子どもの機嫌の悪さ」と弱い正の相関が($r=.39, p<.01$)、「子どもが期待通りにいかない」と中程度の正の相関が見られた($r=.48, p<.01$)。「生々しさへの抵抗」は対応すると考えられたPNPSの「否定的養育」の「非一貫性」と中程度の正の相関が見られた($r=.40, p<.01$)。「相互性」と対応すると考えられたPNPSの「肯定的養育」の「肯定的応答性」と弱い正の相関が見られた($r=.23, p<.05$)。

2. 内容妥当性

表5に子育て質問票の記述統計を示し、表6に子育て質問票とチェックリストの下位尺度毎の合計得点の相関係数と記述統計を示した。評定者3名の評定のケンドールの一致係数は $W=.55$ であった。「子どもの困難」はチェックリストの「子どもの困難」と中程度の正の相関が見られた($r=.53, p<.01$)。「育児困難」はチェックリストの「育児困難」と弱い正の相関が見られた($r=.37, p<.01$)。「親子関係困難」はチェックリストの「親子関係困難」と弱い正の相関が見られた($r=.28, p<.05$)。「生々しさへの抵抗」はチェックリストの「生々しさへの抵抗」と相関係数が有意ではなかった($r=.14, n.s.$)。「相互性」はチェックリストの「相互性」と相関係数が有意ではなかった。 $(r=-.05, n.s.)$ 。

Ⅳ. 考察

(1) 基準関連妥当性

対応すると考えた項目の殆どと相関係数が有意で、一定の基準関連妥当性が確認された。

「子どもの困難」は対応すると考えられた日本版PSIの「子どもの特徴に関わるストレス」の「親を喜ばせる反応が少ない」「子どもの機嫌の悪さ」「子どもの気が散りやすい／多動」「刺激に過敏に反応する／ものに慣れにくい」と中程度の正の相関が見られた。この

表4 子育て質問票の下位尺度の合計得点と他尺度との相関、各尺度得点の記述統計

子育て質問票	子育て質問票					平均	SD	α	n	Range
	子どもの困難	育児困難	親子関係困難	生々しさへの抵抗	相互性					
子どもの困難						11.85	3.53	.71	98	9-32
育児困難						15.43	5.23	.70	98	5-20
親子関係困難						9.11	3.73	.66	97	6-25
生々しさへの抵抗						11.33	3.61	.52	97	4-13
相互性						8.79	3.33	.01	97	7-14
日本版 PSI	子どもの特徴に関わるストレス									
	親を喜ばせる反応が少ない	.48**	.47**	.17	.40**	11.85	3.53	.84	98	8-25
	子どもの機嫌の悪さ	.57**	.34**	.39**	.36**	15.43	5.23	.84	98	7-28
	子どもが期待通りにいかない	.65**	.37**	.48**	.36**	9.11	3.73	.82	98	5-19
	子どもの気が散りやすい/多動	.52**	.30**	.36**	.33**	11.33	3.61	.72	97	5-19
	親につきまとう/人に慣れにくい	.49**	.38**	.24*	.34**	8.79	3.33	.80	98	5-18
	子どもの問題を感じる	.64**	.36**	.35**	.43**	7.52	3.02	.75	98	4-14
	刺激に過敏に反応する/ものに慣れにくい	.56**	.38**	.34**	.44**	6.97	2.39	.72	98	4-14
	親自身に関わるストレス得点									
	親役割によって生じる規制	.23*	.52**	.20	.26*	18.32	5.38	.85	98	8-32
	社会的孤立	.37**	.52**	.21	.48**	14.44	4.96	.84	98	7-27
	夫との関係	.09	.24*	.06	.27**	12.55	4.99	.86	98	5-25
	親としての有能さ	.61**	.63**	.50*	.43**	20.13	4.65	.85	96	9-30
	抑鬱・罪悪感	.48**	.39**	.67*	.40**	9.76	3.44	.86	95	4-19
	退院後の気落ち	.20	.37**	.28	.48**	8.57	3.92	.82	96	4-20
	子どもに愛着を感じにくい	.50**	.40**	.48*	.35**	6.32	2.37	.65	98	3-12
	健康状態	.16	.50**	.04	.33**	6.57	2.23	.70	98	3-13
PNPS	肯定的養育									
	関与・見守り	-.32**	-.26**	-.24*	-.33**	28.34	3.73	.70	96	19-36
	肯定的応答性	-.35**	-.45**	-.24*	-.23*	17.36	2.31	.77	98	8-20
	意思の尊重	-.19	-.18	-.25*	-.22*	17.33	2.59	.69	97	11-24
	否定的養育									
	過干渉	.13	.18	.26*	.26*	7.47	1.92	.52	98	5-13
	非一貫性	.11	.13	.32**	.40**	8.51	2.29	.80	98	4-15
	厳しい叱責・体罰	.31**	.07	.45**	.26*	12.16	3.5	.85	98	7-24

注1) **は1%水準で有意 *は5%水準で有意な相関係数を示した

表5 子育て質問票の下位尺度の合計得点の平均・標準偏差・ α 係数 (N=64)

	子どもの困難	育児困難	親子関係困難	生々しさへの抵抗	相互性
平均	23.17	13.64	19.83	7.77	11.41
SD	5.77	3.9	3.75	2.95	1.85
α	.76	.74	.70	.67	.24
range	9-38	6-22	11-29	4-19	6-15

表6 チェックリスト項目の合計得点の平均と子育て質問票下位尺度の合計得点の平均との相関係数と記述統計

	子どもの困難	育児困難	親子関係困難	生々しさへの抵抗	相互性	平均	SD	α	range
子どもの困難	.53**	.23	.28*	.30*	-.11	14.58	1.72	.40	9.67-18.33
育児困難	.23	.37**	.38**	.25*	-.02	14.01	2.00	.62	9.67-18.33
親子関係困難	-.03	.08	.28*	.03	.13	16.76	2.33	.80	12.00-21.67
生々しさへの抵抗	.03	.15	.34**	.14	-.20	16.58	2.14	.77	12.00-21.33
相互性	.09	.19	.08	.22	-.05	9.83	0.91	-.33	8.00-11.67

**は1%水準で有意 *は5%水準で有意な相関係数を示した

ことより、「子どもの困難」は子どもの多動や易刺激性などの発達の特徴と子どもが養育者を喜ばせる行動の少なさや子どもの不機嫌さなど、養育者が子ども自身に困っていたり手を焼いている程度を測っていると考えられる。この結果は小池ら(2017)が「子どもの困難」は「親の子に対する眼差し」と「子どもの特徴」の相互作用が影響していると述べていることと合致すると考えられる。「育児困難」は日本版PSIの「親自身に関わるストレス」の「社会的孤立」とは中程度の正の相関が、「夫との関係」と低い正の相関が見られた。「育児困難」は養育者と周囲との関係から生じるストレスと相関が見られたといえる。周囲との関係にストレスを感じていたり、孤立している場合、養育者が子育てで支援を受けていると感じにくいと考えられる。ゆえに「育児困難」が周囲から子育てを支援されていると感じているか否かを測っていることが示唆された。「親子関係困難」は日本版PSIの「親自身に関わるストレス」の「親としての有能さ」、「抑鬱・罪悪感」と中程度の正の相関が見られ、「子どもの特徴に関わるストレス」の「子どもの機嫌の悪さ」と低い正の相関が、「子どもが期待通りにいかない」と中程度の正の相関が見られた。「親役割によって生じる規制」、「夫との関係」は相関係数が有意ではなかった。小池ら(2017)が「親子関係困難」は家族の連携機能についても測っているのではないかと考えていたが、親役割による規制や夫との関係と対応すると考えられたが、今回の結果からは親役割や夫との関係によるストレスではなく、「親子関係困難」は親としての自信のなさや抑鬱・罪悪感、子どもの不機嫌さや期待通りにいか

ないことから生じるストレスとの相関がみられ、「親子関係困難」は子育てに対する自信や罪悪感、期待といった感情を測っているといえる。「生々しさへの抵抗」はPNPSの「否定的養育」の「非一貫性」と中程度の正の相関が見られたことから、子どものペースよりも自分ペースや気分を優先してしまいやすい傾向があると考えられる。小池ら(2017)が「生々しさへの抵抗」の高得点事例は子どもの成長や状態を基にした子育てが難しいと考えたように、子どもにペースを合わせる難しさを測っていると考えられる。「相互性」はPNPSの「肯定的養育」の「肯定的応答性」と弱い正の相関が見られた。「相互性」は親子の関わりでの肯定的な側面を測っていると考えられる。小池ら(2017)は「相互性」の項目群は養育者が子どもに自分を重ね、自分の不安の一部を担わせている可能性を測っていると考えていたが、本研究の結果より「相互性」は肯定的な関わりを測っている可能性があり、養育者や親子関係の強みについて示唆が得られる項目なのではないかと考えられる。しかし相関係数が低く、尺度としての妥当性は不十分であるといえる。

(2) 内容妥当性

Ⅲ結果の2より、子育て質問票の内容妥当性について以下、考察を行う。「子どもの困難」はチェックリストの「子どもの困難」と中程度の正の相関が見られ、子どもの抱える問題とそれに対して養育者が感じる困難さの両方を測っていると考えられる。「育児困難」はチェックリストの「育児困難」と中程度の正の相関が見られ、養育者の子どもを情緒的に抱える力と子育てが支援されていると感じているかを測っていると

えられる。「親子関係困難」はチェックリストの「親子関係困難」と弱い正の相関が見られ、子ども及び子育てへの養育者のネガティブな感情と子どもや子育てへのコミットメントの度合いを測っていると考えられる。「子どもの困難」「育児困難」「親子関係困難」が弱～中程度の一致率であったのは、評定者による評定の一致率が $W = .55$ に留まったことや5件法による評定だったことも要因であると考えられるが、「子どもの困難」の場合、子どもの発達の特徴とそれに対して親が感じている困難さというように複合した項目群である為、子どもの発達の特徴はあまり見られないが、親が子どもに対して困難さを感じているなどの場合が生じ、中程度に留まったと考えられる。同様に「育児困難」も実際に子育て支援を受けられているかという部分と、実際の支援の有無にかかわらず、養育者がそれを支援されていると感じられているか否かというように複合している為、相関係数が中程度に留まったと考えられる。「親子関係困難」はチェックリストの「親子関係困難」と弱い相関が見られた。表6よりチェックリストの「子どもの困難」「育児困難」「生々しさへの抵抗」とも弱い相関係数が見られたことから、子育てへのコミットメントの度合いやネガティブな感情を測っているだけでなく、それらの感情が「子どもの困難」「育児困難」「生々しさへの抵抗」などと関連しているものもある為、「親子関係困難」は複数のチェックリストの項目群との有意な相関係数が見られたのだと考えられる。「生々しさへの抵抗」と「相互性」はそれぞれチェックリストの「生々しさへの抵抗」及び「相互性」と相関係数が有意ではなかった。この結果からは「生々しさへの抵抗」が測っているものは、子どものペースに合わせることの難しさや子どもの状態を基にした子育ての難しさを測っているとはいえないが、これは初回面接では子どもの成長や状態に応じることや子どものペースに合わせることの困難さが表れにくい為、チェックリストの「生々しさへの抵抗」との相関係数が有意ではなかったのではないとも考えられる。「相互性」は親子の情緒的な交流の難しさを測っているとはいえず、特に親子の情緒的な交流に関して、読み取ることが難しいのではないかと考えられる。

したがって「生々しさへの抵抗」と「相互性」を除いた下位尺度において、それぞれチェックリストの対応する項目群と相関係数が有意であり、内容的妥当性が確認され、表3のチェックリストの内容を子育て質問票は測っていることが示唆された。

V. 総合考察

本研究では従来からよく行われている既存の尺度を外的基準とした基準関連妥当性の検証だけではなく、臨床心理士によるインタビュー報告書の評定を用いた内容的妥当性の検証を行った結果、一部の下位尺度において基準関連妥当性、及び内容妥当性が確認され、子育て質問票が臨床場面における小学生の子どもを持つ養育者への活用に一定の有用性を持つことが示された。

今回の結果からは、「子どもの困難」は実際の子どもの発達特徴・問題を測ると共に、子どもの問題に対して養育者が抱く困難さやストレス、困惑などのネガティブな感情を測っていると考えられる。得点が高い場合、子どもの問題への支援と共に、子どもの問題への養育者の困惑やストレスを緩和するような支援が望ましいと考えられる。「育児困難」は実際の子育て支援の有無よりも子育て支援を受けているという養育者の主観と子どもを情緒的に受けとめるといった養育者の器の機能を測っていると考えられる。得点が高い場合、養育者が周囲と信頼関係を結び、支えられていると感じられるような支援と、養育者が子どもを情緒的に抱えられるよう支援することが望ましいと考えられる。「親子関係困難」は子どもや子育てへのコミットメントの度合い、コミットメントしているが故の子育てへの自信、罪悪感、期待といった子育てに起因する様々な感情を測っていると考えられる。また「子どもの困難」「育児困難」「生々しさへの抵抗」と関連している為、この下位尺度について解釈を行う場合には、「子どもの困難」「育児困難」「生々しさへの抵抗」の回答を踏まえて多義的に行うことが望ましいと考えられる。あまりに得点が高い場合、子どもや子育てへの関与や責任感が強い分、抑鬱や罪悪感を抱きやすいと考えられる為、子どもや子育てと適度に情緒的距離を取れるよう支援を行うことが望ましいと考えられる。「生々しさへの抵抗」は基準関連妥当性の検討結果からは、子どもの成長や状態に応じて子育てをする事の難しさや子どものペースに合わせて関わることの難しさを測っていると考えられるが、最初に想定していた下位尺度以外の下位尺度との相関も見られた為、「生々しさへの抵抗」が測定しているものは子どものペースに合わせることの難しさに留まらないと考えられ、複合的な項目群であると考えられる。一方で内容的妥当性の検討結果は、チェックリストの「生々しさへの抵抗」との相関係数は有意ではなかった。このことから「生々しさへの抵抗」は子どもの状態に応じた子育てや子どものペースに合わせることの難しさを複合的に

測っており、初回面接だけでは読み取りにくいものを測っていると考えられる。ゆえに、子育て質問票は初回面接では表れにくい、語られにくいものを測ることができることが示唆され、「子どもの困難」、「育児困難」、「親子関係困難」においても同様であると考えられる。「相互性」は養育行動の「肯定的応答性」と弱い正の相関が見られたが、内容的妥当性は確認できなかった。項目数が少ないことや小池ら（2017）の結果と同様に内的一貫性が低かったことも要因であると考えられる。基準関連妥当性の結果から「相互性」は肯定的な関わりを測っている可能性があるが、相関係数も低く、統計的に扱うことに不向きな項目群であると考えられる。故に他の下位尺度の結果を解釈する際に補助的に使用することが可能であると考えられる。

これまで子育て質問票の活用方法がその使用者の経験に委ねられていたが、本研究で妥当性と信頼性を検証したことで、「相互性」以外の下位尺度については、経験を問わず子育て質問票を小学生の子どもを持つ母親の子育て支援のアセスメントに役立てることが可能になったと考えられる。今後の課題として、子育て質問票を用いてアセスメントを行い、子育て支援に役立った事例を積み重ねる必要があると考えられる。

〈付記〉

本論文は一般社団法人日本心理臨床学会2016年度実践的研究助成（No.2016（J）-9）を受けて執筆した。

文献

- Abidin RR. (1986). Parenting stress index manual. 1st ed. Pediatric Psychology Press
- 橋本朋広・松本緑・後藤貴一・岩佐陽子（2013）. 家族機能及び虐待リスクを捉える尺度項作成の試み. 大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要, **6**, 33-37
- 伊藤大幸・中島俊思・望月直人・高柳信哉・田中善大・松本かおり・大獄さと子・原田新・野田航・辻井正次（2014）. 肯定的・否定的養育行動尺度の開発：因子構造及び構成概念妥当性の検証. 発達心理学研究, **25** (3), 221-231
- 川部哲也・長谷川智枝・西地まどか・平岡尚子・呉伽耶・堂野和人（2013）. 発達障がいの特徴を捉える尺度項目作成の試み. 大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要, **6**, 3-8
- 川原稔久・総田純次（2013）. 「子育て支援 質問票」研究の背景と全体像. 大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要, **6**, 3-8

- 小池徳子・三木直子・川部哲也・木村長永・高原主悦・長谷祥香（2017）. 「子育て質問票」の因子構造とその特徴の研究. 大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要, **10**, 57-64
- 奈良間美保・兼松百合子・荒木暁子・丸光恵・中村伸枝・武田淳子・白畑範子・工藤美子（1999）. 日本版Parenting Stress Index (PSI)の信頼性・妥当性の検討. 小児保健研究, **58**, 610-616
- 総田純次・平岡尚子・西地まどか・作田大輔・澤樹亜実・後藤貴一・川原稔久（2014）. 心理臨床センター臨床事例における子育て質問票プロフィールの研究. 大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要, **7**, 29-36
- 高橋幸治・作田大輔・澤樹亜実・河邑淑子・石田暢子・中島歩（2013）. 親子の心と体の関係を探る尺度項目作成の試み. 大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要, **6**, 9-19

（2021年1月12日受稿，2021年2月1日受理）